教育委員会会議の概要（令和元年６月定例会）

◆　日　　時　令和元年６月２８日（金）午後２時から午後３時１０分まで

◆　場　　所　教育局第１会議室

◆　出　席　者

教　育　長	佐　々　木　洋	出席
委員・教育長職務代理者	吉　田　利　弘	出席
委　　員	加　藤　道　代	欠席
委　　員	花　輪　公　雄	出席
委　　員	中　村　尚　子	出席
委　　員	里　村　正　治	出席
委　　員	阿子島　佳　美	出席

◆　会議の概要

１　開　　会

２　議事録署名委員の指名　　花　輪　委　員

３　報　告　事　項

（１）上愛子小学校、作並小学校・新川分校、大倉小学校統合について

（学校規模適正化推進室長　報告）

資料にもとづき報告

里　村　委　員　地域の方々と丁寧な意見交換を行い、このような結論に至ったと思うが、新川分校を含めた３小学校及び１分校と言ったほうが良いのではないか。

学校規模適正化推進室長　正しくは３小学校と１分校の統合になるが、新川分校は本校が作並小学校であり、現在休校中のため通っている児童はいない。

吉　田　委　員　今から20年程前にこの地域で中学校が統合された。大倉中学校と熊ケ根中学校が統合され広陵中学校という校名になった。今回は上愛子小学校へ統合ということだが、新しい学校名を付けたいという意見は出なかったのか。

学校規模適正化推進室長　作並地域や大倉地域の方から学校名を変える考えはないのかという意見はあったが、これまでの仙台市の学校の名前の付け方として、その地域から学校の名前を取っていることから、引き続き上愛子小学校にする考えをお伝えした。また、上愛子小学校の名前を変えるならば、上愛子小学校も閉校という形になる。上愛子小学校を閉校する考えはないので、学校名は引き続き上愛子小学校であるという説明をさせていただいた。

（２）平成31年度仙台市標準学力検査および仙台市生活・学習状況調査の結果について

（学びの連携推進室長　報告）

資料にもとづき報告

中　村　委　員　学力が上がったことについて、児童生徒の頑張りと先生方の努力を評価したい。経年の同一集団による推移は見やすくなっており、興味深い。中学３年生は、数学以外の科目が上がっている。中学３年生でゴールではないので、その先を見越して意識が変わっている印象を持った。４ページの小学校の応用力の表現で、国語と社会は昨年より上がっているが、数学は昨年と同じ状態で目標値を５ポイントを超えて下回った部分が多い。表現は、国語や社会で多く勉強するイメージもあるが、数学でも大切な分野だと思うので、対策が必要だと思う。

３ページの下段の４年生の理科が目標値を５ポイントを超えて下回っているのが残念だ。原因について、先ほど実験や実体験にリンクしていないという説明があったが、詳細な分析が必要だと思う。

21 ページの 34、35 番のスマホの使い方について、「家の人と話し合っている」、「家の人と約束したことを守っている」という部分は、家族で話し合いができて、それが守られていることを評価すべきだと思う。スマホが手元にあるのが当たり前の生活になっているので、学校も家庭も巻き込んで、今後も継続して欲しい。

それから、15 ページの７番、「国語・社会・算数（数学）・理科・英語の中に好きな授業があるか」という質問は、７学年で下回っている。得意な科目であれば幾つか出てくるのだと思うが、やはり勉強が大好きという子は少ないので、楽しく魅力ある授業が望まれているのだと思う。

そして、31 ページの 14、15、17 番の学習意欲に関する部分が、全て昨年度を下回っている。同じように 71、72 番、「将来の夢や目標を持っている」「自分の将来を考えると楽しい気持ちになる」という項目も下回っている。ところが、50 番、「自分で計画を立てて勉強している」という項目は落ち込んではいないので、勉強は計画的にしているが、勉強がわかって楽しい、将来につながる、夢が持てるという感じが見えてこない。夢よりも現実的なものを見ているのかわからないが、学力のみで将来が決まるわけではなく、いろいろな形で夢を実現する方法があるということまで考えが至っていない気がする。子供たちに将来こんなこともあると伝えられるような取組みが必要ではないかと感じた。

花　輪　委　員　前半の学力部分で理科と算数については、何か構造上の問題があるのではと考えるところもある。例えば、触る、見る、手を動かす、いわゆるアクティブラーニングの時間が少ないから、自分の身の回りの現象に対して理科的な発想ができないのかとも思える。その辺を分析する必要があるのではないか。

後半の生活調査では、中学校の１年生は、中学校に入学したことでモチベーションが高いが、中学校２年生、３年生になるとモチベーションが下がるのが気になる。例えば、16 ページの 14、15 番、それから 17 ページの 17 番 a など、中学校１年生までは維持しているが、２年、３年になると大きく下がる。14 番では、「勉強を通して新しいことがわかるようになるのは楽しい」と考える人が 10%ほど少なくなる。その裏返しだが、17 ページの 17 番の b、「自分が世の中の役に立てるように勉強を頑張る」というのに対して、「どちらかといえば当てはまらない」が増える。次の 18 番も、中学校２年生で下がってしまう。それから、24 ページの 48、50、51 番だが、明らかに中学２年生、３年生は学習に対する意欲が下がっている。さらに 29 ページの自分づくりに関する項目では、例えば 71 番「将来の夢や目標を持っている」が中学２年生、３年生で 10%以上下がってしまう。

中学校に入学して、頑張ろうと思ってくれるのは非常にいいことなので、その思いをちゃんと達成させてあげたいが、やはり高校受験が影響していると思う。点数を取らないとだめだという価値観が蔓延して、点数を取れない自分を肯定できなくなり、勉学意欲がなくなっているのだと思う。決してそんなことはなく、いろいろなところで自分を生かせる、社会の中で存在感を主張できることがいっぱいある。ある人は部活の中にそれを見出すかもしれないし、多様な価値観を持ってくれるような導きをしなければいけない。そういうギャップをなくすような施策が必要だと思う。

吉　田　委　員　学習内容に関する経年変化では、中学校１年生の社会科の基礎が目標値を上回ることができた。これは過去３年間ずっと下回っていた。学びの連携推進室を中心に学校、子供たちの頑張りがあったのだと思う。一方で、６年生の算数応用が、29 年度から目標値を下回

る結果になっている。同じ学習内容に対して同じ結果が出るということは、仙台市の子供たちに対する何かしらの課題があると思うので、それに対する手だてを考えなければならない。

学びの連携推進室では標準学力検査の結果を受けて、学校側にフィードバックするいろいろな手だて、提案をしているが、検査が始まってから、10 年が過ぎている。今後の検査のあり方についても考えなければならないと思うが、改善した点があれば教えてほしい。

もう１点は、学習状況調査の 31 ページの９、10、12 番。授業を通した人間関係づくりを大切にしたいと思っている。というのは、我々はいじめ問題を抱えている。いじめというのは人との差異に起こるいろいろな問題であり、授業中の対話を通して、自分の考えと違う人がいる場合に、どのようにふるまえばいいのか、そういったことを学ぶことも非常に大切だと思う。だから、授業中に質問ができないということは、話し合いのあり方の指導に課題があるとも解釈できる。そういう意味で、学びの連携推進室からも学校のほうに、示唆を与えていただければと思う。

学びの連携推進室長　算数に関しては、小学校５年生、６年生になると、同じところでつまずいていることは以前から認識している。小学校では、放課後等学習支援事業を昨年度から進めてきて、子供たち一人一人に適した指導法を実施し、対策を進めている。速報値の中では若干ではあるが、改善の方向に向かっているというデータがあるので、それを成果として、各学校への支援を進めていきたい。

改善方策関係では、現場の教員が指導するので、それにマッチした研修が必要ということを考え、昨年度まで実施していた全員悉皆での提案事業という形、各学校から必ず１名出て、その授業を見て持ち帰り生かすというサイクルを一旦やめにする。１つの授業だけを見て、全てがわかるわけではなく、これまでの積み重ねのどこでつまずいているか、単元構成をしっかり踏まえて、その単元構成の中でどこにポイントを置いて指導したらいいかと、１単位時間の中だけではないということを強調していきたい。指導の連続性を意識した提案ができるように、授業を映像化したいと思っている。現在もＤＶＤ化して各学校に貸し出しを行い、各学校で教員が自分のスケジュールに合わせて視聴できるようにしている。あわせて今回は夏と冬にレベルアップ研修を強化したいと思っている。このレベルアップ研修は、１つの授業だけではなくて、その教科独特の指導法、指導の工夫がされるところをまず先生方に見ていただく。そのポイントをしっかり現場の教員が見た上で、自校の子供に合わせて指導できる研修に強化したい。

３点目の話し合い活動関係だが、授業の中で対話というのは非常に人間関係づくりについても大事だと認識している。今年度はたくましく生きる力育成プログラム、「たく生き」の教科の中での活用を教科横断的に行う。あるいは「たく生き」でなくとも対話で人間関係づくりがきちんとなされるような支援をしていきたい。

阿子島委員　学習面では皆さんが指摘したように、理科と算数、数学の応用力が伸びていない点が、これまでの成果があらわれておらず残念。生活面で、14 ページの１番「友達に会えるから毎日学校に行きたい」という答えが少し減少傾向にあるが、４番の「学級では自分の良いところを認めてもらっていると思う」と肯定的に捉えているところが、中学２年生を除き増加している点、また 18 ページの家庭生活においても、「家の人はあなたの良いところを認めてくれている」と答えている子供たちの数が増えているのは、とてもいい傾向だと思う。

22 ページの「携帯電話やスマホ、インターネットに接続している機械を使う時間が１日２時間以上ある」という割合が増加する傾向にあり、24 ページの「家庭での読書の時間が１日 30 分以上取る」という割合が全然伸びていないことはとても残念だと思う。学校では読書活動を勧めているが、30 分以上だと時間的に長いのかもしれないので、15 分など短い時間の質問に変えていただければ、もう少し伸びるのかと期待したい。

それから、17 ページで「自分が世の中の役に立てるように勉強を頑張る」という項目が減少している。また、26 ページの 57、58 番の「新聞やテレビのニュースなどに関心がある」、「地域の歴史や自然について興味や関心がある」という項目は、小学５年生から中学１年生まで減少しているというのが残念に思う。先ほど小学校の５年生や６年生の社会が伸びているということがあったので、もう少し地域に目を向けていただくような授業の進め方をしていただけるといいと思う。それと並んで 59 番「地域の行事に参加している」と答えた割合も減ってきているので、子供たちは社会の中の一員だということも、授業を

通して自覚を持たせていただけるようにお願いしたい。

里　村　委　員　１つは、こういう調査資料をどう見るかだが、例えば少し下がった項目に対して、大丈夫と見るのか、非常に大きなことが兆候として出ていると見るのか。そこの解釈がすごく大事だと思う。その辺も含めて依頼したいのは、東北大学等の専門の方といろいろ意見交換をして、その結果を報告してほしい。去年も同じ報告を受けたが、その後の動きがどうなっているのか分からないのでお願いしたい。

２つ目は、理科の問題。この表の見方をどう考えるかだが、目標値に対して５ポイントを超えて下回ったものに黒三角をつけることにしている。３ページの理科の５年生の部分を見ると黒三角ではないが、目標値には達していない。誤解を与えやすい表現で、５ポイント以上下回ったら黒三角だが、４ポイントを下回ったら何も付けないでいいことになる。４年生は非常に悪かったが、５年生は悪いけれども去年と比べてよくなったと見ているのか。去年の理科はもっと悪かったと記憶しているので、４年生は改善されなかったが、５年生、６年生は少しずつ改善されたと思っているが、その辺を説明してほしい。

これは他教科にも当てはまるが、調査をした結果をどういうふうに解釈するかということと、そのためにどういう手だてを打とうとしているのかを聞きたい。その手だてを聞いた上で、来年の今ごろそれが有効だったかを聞きたいと思う。

もう１つ申し上げると、平均値の問題とばらつきの問題がある。仙台市の全ての学校で理科が悪いのではなく、良い結果を出している学校もある。なぜ良い結果が出ているのか研究して、ほかの少し及ばない小学校に応用してもらうとか、平均値で見ないでばらつきを見るということを心がけていただきたい。そういう意味では、具体的に対策を打つときに、そういう数字の見方で対策を打って、そして１年後にどうだったという報告をしていただきたいと思う。

中村委員からも指摘があった 15 ページの７番だが、この質問の意味は、やはり国語・社会・算数・理科・英語の中に１つでも好きな授業があってほしいということなのか。図工や音楽などは入っていない。その点について意見交換をしたらいいのではないか。この５教科が嫌いでも、図工が好きだったら立派ではないかという意味だ。それから、仮にこの５教科に絞って見ると、平成 31 年の結果をどう考えるか。ほかの委員からも指摘があったが、この図は平成 22 年と比べてものすごく落ちている点と、小学校２年生から中学校３年生にかけて大きく落ちている点だ。これに対してどういう施策をやろうとしているのかを聞きたい。

ほかの委員から指摘があったが、16 ページの 14 番と 17 ページの 17 番が中学 2 年生で大きく下がっているが、これをどう評価しているかを説明してほしい。仮にすごく気になる数字だということであれば、本気になってリカバーする方法を考えなければいけない。

それから、スマホについてである。39 番から 42 番までスマホのアプリの使用状況についての質問があって、想像したように年々上がってきている。これをどう考えるかだ。スマホを使うなと制限して、上昇傾向にあることをストップしようとしているのか。そうではなくて、上昇傾向にあるのはストップせずに、適切なスマホの使い方を教育しようとしているのか。その辺の説明をしていただきたい。今や大学の授業もほとんどアプリを使ってやっているから、紙を持ってくる生徒はいなかった。それはいずれ小学校も中学校もｅラーニング等になっていくのだろう。だからこそ、スマホを使った教育のあり方について、どのように考えているのかを知りたい。この調査自体は非常に示唆に富んだものなので、めりはりをつけて説明していただいて、来年の結果を期待したいと思う。

最後に、今教科書の選定をやっているが、去年理科の結果が悪かったので、教科書選定にそれをどう加味したらいいか、個人的に悩んでいる。選択した教科書が難し過ぎて４年生はついていけないのか。教科書の問題ではなく理科の先生にもう少し頑張ってもらわなければいけないのか。あるいは今の社会は理科に対する興味が一般的に薄れてきているが、技術で成り立っている我が国であるから、みんなが理科嫌いになったら日本の将来が不安になるので、理科をやらせようとしているのか。その辺のところをどう考えているのか聞かせて欲しい。このことは理科の教科書選定に、どういうふうに頭に入れて選ばなければいけないのか。

学びの連携推進室長　数字の見方については、0.1 あるいは１ポイント、この数が何を示しているのかというところは、これから我々が教育施策を推進していく中でめりはりをつけたものを指標として大事に取り扱っていきたいと思っている。大体１学年 7,000～8,000 人の受検者がおり、

１％、0.1％の差がどのような意味を持つのかということも含めて、これから分析を進めていくと同時に、学校現場の状況についても、学校からの聞き取りあるいは学校訪問を行ない、一緒に取り組みの様子を見ていきたいと思っている。

大学等との研究に関しては、これまでも東北大学と連携して専門的な知見から分析をしてきた。科学的学習意欲のプロジェクトという形で毎年リーフレットを出しているが、保護者や地域に対してなかなか浸透できていない学校もあると耳にしている。そのため教育委員会として、学校が苦労している部分を細かに見ていく必要があると思っている。何らかの機会に、東北大学とも連携した結果、次の手だてはこうだといえるよう取り組みを進めて行きたい。

好きな教科に関して、主要５教科と言われる科目のみを設問として設けているが、その他の教科にも子供たちにとって楽しみな教科がたくさんあると思っており、設問項目について検討していきたい。

それから、スマホに関しては、我々も大変危惧している。世の中がこのような状況になった今、持つなということは難しいが、これまで教育委員会として取り組んできたスマホを使うときの自分の能力をいかに子供たちにつけてあげるかというところに主眼を置いて、先ほどの東北大学の連携とも重なるが、スマホを１時間以上使うとこういう結果になるということをリーフレットにしているので、保護者に向けても各学校が工夫して説明している。ただ、家庭でスマホの使い方について話し合っているという数字が伸びているにも関わらず、こういったアプリを使っている状況があるというのも、現段階ではどう分析していいか困惑している。約束はしているが、実は勉強中使っている。でも、勉強中に辞書として使うのは非常に有効な手だてだということもわかっている。子供たちは家庭学習の中で、親の見えないところで使っているアプリ、動画や通信アプリは、東北大学との研究では通信アプリが一番学力に影響を及ぼすという結果が出ている。我々の中にも学生時代、音楽を聞きながら勉強をしたことがある方が、私も含めていると思う。気分転換にはなるが、通信アプリだと相手がいることから、友達から何かメッセージが送られてくると、そこで思考が停止してしまうのではないかということが東北大学との研究で明らかになってきている。なお東北大学との研究の際には、その辺をもう少し科学的な見地からも指導を仰ぎたいと思っている。とにかく自己管理能力に主眼を置いていきたいと思う。

最後に教科書の採択については、教育指導課で行っているが、このデータは教育指導課にも共有しているので、そちらの議論の際に確認をお願いしたい。

４　閉　　会